

## 廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術における 復元的考察：豪潮宝篋印塔、三所権現御正体、不動 明王立像

知足，美加子  
九州大学大学院芸術工学研究院：准教授

<https://hdl.handle.net/2324/7172153>

---

出版情報：Japanese mountain religion. 62, pp.49-67, 2018-10-19. The Association for the Study of Japanese Mountain Religion

バージョン：

権利関係：



# 廃仏毀釈の影響を受けた英彦山修験道美術における復原的考察

——豪潮宝篋印塔、三所権現御正体、不動明王立像——

知 足 美加子

はじめに

英彦山(福岡県)は、羽黒山(山形県)、熊野大峰山(奈良県)とともに日本三大修験山のひとつながら、明治維新の神仏分離令<sup>(1)</sup>と廃仏毀釈<sup>(2)</sup>、修験道禁止令の影響を強く受け、ほぼ伝統が途絶えている。口伝伝承を旨とする修験道文化において文献資料は乏しい。そこで本研究は英彦山修験道美術に注目し、廃仏毀釈時の文化財破壊行為と、それを回避するために加えられた造形的改変部分を調査する。また、文化財の復原<sup>(3)</sup>を通して、忌避または受容された意匠と、その表象の分析を行う。英彦山における明治期の「修験宗廃止の太政官布告」の受容、および修験道思想と仏教、神道等の宗教的表象との関係を問う。

英彦山における廃仏毀釈の経緯について、高千穂有英、広渡正利<sup>(4)</sup>の先行研究からまとめると以下のようなことになる。文久三年(一八六三)、攘夷派の朝廷から国家安泰の祈願を命じ勅使が英彦山に下向する。豊後日田出身の尊王攘夷派の長南梁・光太郎(三州)親子からの思想的な影

響もあり、英彦山は勅願書を契機に尊王派に傾いた。英彦山の十七人の義僧が、攘夷者として署名連判する。英彦山は長州藩と結託し、佐幕派の小倉藩に抗することとなった。同年、小倉藩から長州尊王攘夷派とみなされた英彦山儀徒が検挙をうけ、六十人の山伏が小倉に幽閉される。座主家族は釈放されたものの、首謀者とされた十一人は囚われたまま四年のうちに獄死した(脱出した三名を除く)。中枢を担う指導者達を失った英彦山は、明治維新を乗り越える胆力を喪失したと考えられる。

慶応四年(明治元年、一八六八)香春寺社から神仏分離の布達が英彦山に達せられた<sup>(5)</sup>。神仏分離当時「神兵」(急進派の下級山伏や山外民)は、寺院・堂塔・仏像・仏具を悉く破壊しようとした。幕末の義僧殉難の経緯が、神兵を勢いづけていたのだろう。明治六年、欄宜となった山名豊樹は神職ながらも破壊を好まず、仏像類を隠して守ったという。その後欄宜となった三井八郎は廃仏毀釈を推し進め、神兵数十名と共に仏像類を破壊し、あるいは火に投じた。本論で取り上げる修験

道美術はこの時期に隠され、あるいは改変されたものである。

このような背景を踏まえ、本研究では、明治期に否定された英彦山修験道美術表象の内容を明らかにし、容認と否定の境界を精査することとで、修験道文化の輪郭を浮かび上がらせることを目的とする。研究対象として、英彦山修験者が文化財改変に関わったと考えられる英彦山内の石造《宝篋印塔》、銅製《彦山三所権現御正体》、木彫《不動明王立像》を取り上げる。研究方法は、まず各対象を三次元計測による3D(three-dimensional)データ化や拓本によって形状分析を行う。次に彫刻家である筆者の伝統的彫刻技術と、レーザー加工、三次元印刷などのデジタル技術を組み合わせ、文化財復原を試みる。制作者としての観察や、プロセスの考察・実践を通して新たな知見を得たい。

## 第一章 英彦山宝篋印塔

### 一 豪潮寛海の宝篋印塔

英彦山の中央には約八六五mの石段(大門通り)が銅の鳥居から泰幣殿まで続いており、その左右には坊ほう(山伏住居)が並んでいる。この石段の中ほどに、高さ約八・二mの大型の宝篋印塔がある。宝篋印塔の名は、内部に「宝篋印陀羅尼」を納めたことに由来する。豪潮寛海(一七四九―一八三五年)が文化十四年(一八一七)に制作したものである。豪潮は熊本県玉名市の専光寺に生まれ、比叡山にて修行し、師豪旭のあとを受けて玉名市天台宗寿福寺の住職となった。八万四千基の宝篋印塔の建立を大願し、以来九州北部を中心に立塔している。七



図1 豪潮《阿吽》大興善寺

三歳(数え年)の頃、尾張(愛知県)藩主・徳川斉朝の病氣を加持した功績により、請われて尾張の岩窟寺や長栄寺に留まった。豪潮の書は、肥後の三筆の一人として高く評価され、太くゆつたりとした自由闊達な線の特徴として(図1)。淡墨の書が多いのは、光格天皇から賜った唐墨を「終身の用に供せん」と惜しみながら使用したためといわれている。

宝篋印塔の塔身の梵字は金剛界五仏と方位を表しており、「阿閼如来(ウシ)」「東方」「宝生如来(タラク)」「南方」「阿弥陀如来(キリク)」「西方」「不空成就如来(アク)」「北方」「大日如来(バン)」「中央」を配している。

豪潮の石造宝篋印塔の梵字(金剛界五仏種子、宝篋印塔陀羅尼種子)は、鋭い薬研彫り(断面がV字の陰刻)ではなく、太めの線を陽刻(断面が凸型)していることが多い。これは豪潮の書の豊かな質感を表現するのに功を奏している。豪潮が制作した宝篋印塔について、熊本県・西巖殿寺(一八〇五年)、長寿寺(一八一〇年)、佐賀県・大興善寺(一八〇二年)、長崎県・一瀬(現在は本河内、一八一一年)、禅林寺(一八〇七年)、春徳寺(一八一三年)、清水寺(一八〇一年)、最教寺



図2 豪潮《宝篋印塔(福岡県、長崎県)》

(二八〇一年)、観音寺(一八一七年)、愛知県・萬松寺(現在は神奈川  
県・総持寺、一八一八年)を調査した(図2・3)。廃仏毀釈による移  
築や自然災害<sup>(12)</sup>によって部分的に破損しているものが多い。禅林寺の隅  
飾りは欠損しており、不規則な断面から察するに廃仏毀釈の破壊によ  
るものと推測される。この塔の周囲には、複数の破損仏(首が折られ  
た仏像等)<sup>(13)</sup>が寄せられている。彼の宝篋印塔は様々な宗派寺院に配さ  
れており、天台宗の灌頂を受けた豪潮が宗派を問わず寄与する姿勢が  
うかがえる。

豪潮は、小塔を含めると二千基余りを制作し、宝篋印塔陀羅尼を書  
あるいは塔身に線刻して収めたとされる<sup>(14)</sup>。現存する高さ八m前後の大  
型の宝篋印塔は、西巖殿寺、本河内、英彦山、総持寺の四基である。  
このうち人為的改変を加えているのは、英彦山のものだけである。こ  
れは廃仏毀釈だけではなく、神仏分離令と修験道禁止令の影響を強く  
受け、改変を加えなければ塔を存続できない事態に英彦山が直面した  
ことを示している。復原に際して、四基のうち英彦山宝篋印塔に意匠  
が相似し、且つ破損が少ない本河内宝篋印塔を参考にして復元的考察  
を行う。

宝篋印塔施工を担当した石工<sup>(いし)</sup>の技術や嗜好が反映されたものか、同  
じ豪潮の設計であっても、地域によって隅飾りや反花<sup>かえりばな</sup>、基礎などの  
デザインに違いがみられる。しかし梵字や経文の書体表現は概ね共通  
している。豪潮は塔の設計および書を担当し、彫刻や施工等について  
は各地域の石工に委ねていたことがうかがえる。英彦山宝篋印塔の場

合、施工や改変に直接携わったのは、英彦山内の修験者であろう。英彦山は中世より守護不入の治外法権的な組織を有し、元禄九年（二六九六）に「天台修験別格本山」としての地位が確立している。江戸期には「三千八百坊」といわれ、総人口が約三千人と賑わっていた。<sup>(16)</sup>自治独立の気風により、山内に宗教美術制作を担う山伏たちが在住していたと考えられる。

## 二 英彦山宝篋印塔の改刻

英彦山宝篋印塔の構造は、上から「相輪（1宝珠、2請花a、3九輪、4請花b、5伏鉢）」「笠（6隅飾）」「塔身（7月輪梵字）」「請座



図3 豪潮《宝篋印塔（熊本県、佐賀県、神奈川県）》

（8請花c）」「9基壇」「基礎（10反花、11基礎a、12基礎b、13自然石基礎）」（図4）となっている。

英彦山の宝篋印塔に改変について、これまでの文献では以下の二か所について示されていることが多い。一つ目は、基壇の宝篋印陀羅尼種子（シツチリア）を削って「献燈」の二字を彫り付けていること。二つ目は、反花に亀甲紋を彫りつけ、廃仏毀釈による破壊を免れたことである（図5）。宝篋印塔を燈籠に改変するために、塔身の月輪梵字を彫りぬき、火袋を作っていることも認識されてきた。

筆者は、英彦山宝篋印塔と他の地域のことを比較分析する中で、

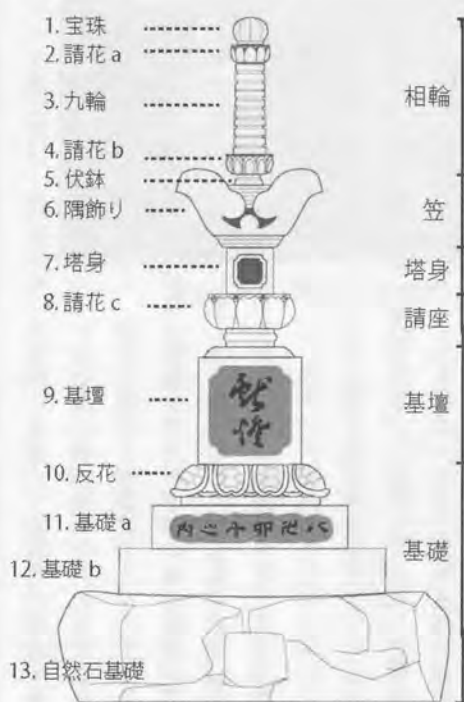


図4 英彦山宝篋印塔各部名称

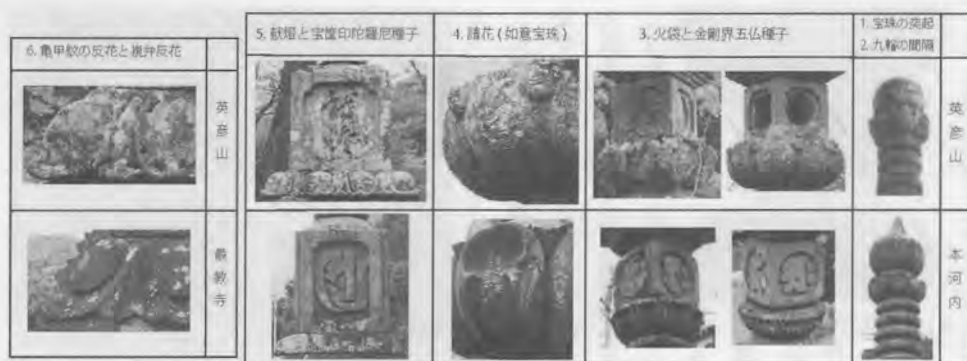


図5 英彦山宝篋印塔と本河内・最教寺宝篋印塔の比較

これまで見落とされてきた新たな改変部分に気が付いた。それは請花に「如意宝珠」が彫られていることである(図6)。如意宝珠とは「種々の物を生ずること意の如くである珠玉」とされる。仏教においては、仏の功德を暗示・莊嚴する象徴的所産である<sup>19)</sup>。また火袋に改変された塔身について、二面は違う形(四角形と円形)で彫り抜かれ、残りの面は彫り抜かずに半月形と三角形を陰刻している。火袋改変の文化的根拠や、すべての面を彫り抜かなかつた理由について論じられた先行研究は見当たらない。さらに解明されていない奇妙な点がある。これは宇野廉太郎が六四年前に指摘していることだが、基壇の「経云」から始

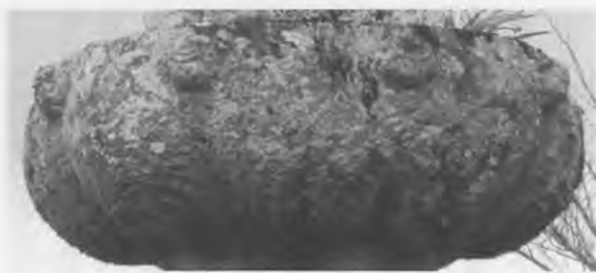


図6 英彦山宝篋印塔請花 1817年

まる経文の要約が、改刻されずに残されていることである。基壇に刻まれた銘文は以下の通りである。<sup>(20)</sup>

〈向かつて右〉「末法逼迫之時、佛法當隱然、猶是塔堅固不滅、一切如來神力、加持祈禱、若有鳥類畜類蛇之類、暫來塔影及踏場草摧破」〈向かつて左〉「感障覺悟、无明忽入佛家、忝領法財、況有衆人、或見塔形、或聞其名、罪障悉滅、所求如意、現世安穩、後生極樂、以二是事一故、□聲思念莫忘、三世諸佛、全身舍利、寶篋印陀羅尼、故納此塔万室、說萬分之一、汝等信矣奉行、右摘

經之要文記」〈背面〉「非是豐財園重遠 即今涌出古楓前 十方諸佛歸二斯塔一 末法燈明幾萬年 右香語 文化十四丁丑歲夏」

銘文の向かつて右面(図7)には「末法窮迫の時、仏法は隠れるようであるが、如來の神力によって、この塔のようにな滅である<sup>(21)</sup>」、およびこの文章が「経文の要約」であることが記されている。左面には、この塔が「釈迦の全身舎利の功德を集めた寶篋印陀羅尼」を納めていることが明記されている。これらは宝篋印塔立搭の仏教的意義を示す重要なものである。しかし明治期



図7 英彦山宝篋印塔銘文(部分) 1817年

に残し、他の部分を改刻したのは何故だろうか。具体的な改変箇所を分析し、仏教的、もしくは修験道的として排除された表象とその理由を考察したい。

主に本河内宝篋印塔と比較し、英彦山宝篋印塔の改変および破損部分を以下の六か所に特定した。1、相輪の宝珠の突起部分の紛失。2、九輪の第三・四番目の間隔が詰まっている。3、塔身は角が裝飾された四角形を彫りすばめ、正面から右回りに「四角、半月、三角、円」が彫りつけられている。うち四角と円は火袋として彫り抜かれている。4、請花を花弁の凹部を頂点とする曲面に再彫刻している。主弁の間に如意宝珠を彫っている。5、宝篋印陀羅尼種子を削り、行書体で「献灯」の二文字を彫りつけている。6、(本河内の反花座は花弁を表現しない繰形座なので最教寺のものと比較)複弁花弁の一層目に亀甲紋が彫り込まれている。

六か所の改変についての考察は以下の通りである。

1、尖頂宝珠の造形は、宝珠の功德を表現する火炎光背が発達、もしくは蓮華の蕾を祖型にしたなど諸説ある<sup>(22)</sup>。英彦山宝篋印塔は宝珠上部を曲面に仕上げており、尖頂部を意図的に削ったことがうかがえる。「宝珠を五大思想の〈団〉に改刻したもの」と筆者は推測する。

2、明治期に、英彦山の塔は一度解体して改変を行った<sup>(23)</sup>。そのため接合部である九輪の第三・四番目が損傷したと考えられる。

3、本河内宝篋印塔の塔身は正面から右回りに「阿闍如来(東)、宝生如来(南)、阿弥陀如来(西)、不空成就如来(北)」の種子が豪潮の書体で月輪に陽刻されている。一方、英彦山宝篋印塔は、神道の燈籠とするために月輪梵字は削られている。その塔身は、(火袋を表現したのか)四角形に一段彫りすばめ、その面に「四角、半月、三角、円」

が彫り付けられている。正面の一段目の四角形の辺の中央部が僅かだが外に膨らんでおり、ここに月輪の円が彫られていたことがわかる。燈籠は、日光の入る東側に円形、月光の入る西側に半月形を彫り付ける場合がある。この塔は南方を向いているため、円形は東方、半月形は西方に位置している。また正面に火袋の格子である四角形を配することになり、燈籠の体を成すといえる。不思議なのは、背面に三角形を配していることである(図8)。このような燈籠は他に見当たらない(図9)。そこで筆者は、三角形の意匠について、五大思想(地水火風空)を思想的根拠として検討した。密教における五大と五形と五方(地・四角・東、水・円・西、火・三角・南、風・半月・北、空・宝珠・中央)の結びつきから英彦山の塔身を見ると、方位と形が一致しない。再考した



図8 英彦山宝篋印塔塔身(北面) 1817年



図9 西巖殿寺内荒神社燈籠  
制作年不明

ところ、仏そのものの表象と関連付けること自体が誤りであることに気づいた。改刻時の英彦山山伏は、この塔を燈籠とみなすことを重視しており、自ずと円と半月の位置は決まっていた。しかしながら、彼らはこの塔を単なる燈籠ではなく、造形として「仏教の五大思想を暗示させる」ものとしたかったのではないか。五大として、正面から左回りに地(四角)、水(円)、火(三角)、風(半月)、空(団・中心の宝珠)と配置した、と筆者は推測した。その意図を簡単に悟られない様に配慮したと仮定すれば、背面の三角形の輪郭が曖昧、かつ中心が僅かにずれている点について納得がいく。燈籠の火袋として彫り抜かれた正面の四角と円の面は、参道の参拝者からの視認性が高い。一方、背面にある三角形は最も見えにくい位置に配されている。五大思想との関連を容易に悟られない工夫を施したレイアウトである。

4、塔身の請花は、花卉の凹部だった部分を頂点とする曲面に彫り直している。高所にあるため気づきにくい、主弁の間に八つの如意宝

珠がある。三重の条線が丁寧な彫られており、形も美しい。改刻前から宝珠と花卉を組み合わせていたとしたならば、神仏融合の造形として珍しいものである。主弁間の細い尖形花卉から如意宝珠を彫り直すのは困難であり、改刻に携わった石工(山伏)の彫刻技術が高いことがわかる。宝珠は神道の意匠としても用いられるため、廃仏毀釈時も許容されたのであろう。ここでの山伏の改刻の線引きは「蓮華」の意匠であることがわかる。しかし不明なのは、蓮華を否定しているにも関わらず、基壇にある仏教経文の要約は削りなかつたことである。そこで英彦山山伏達は「仏教を荘厳する(仏教の優位性を示す)表象」を排除した、と筆者は考えるようになった。つまり彼らは仏教の教義の否定よりも、権威・価値を荘厳する表象に留意していたと推測される。

5、宝篋印陀羅尼種子の陽刻部分を削り、勢いのある行書体で「猷灯」の二文字を陰刻している。豪潮は一八三六年に逝去しており彼の筆とは考えにくい、彼の書体に倣ったものであり達筆である。宝篋印塔を燈籠とみなすための決定的な改刻である。

6、本河内の塔の反花座は、花卉を表現しない繰形座である。そこで複弁の反花座をもつ最教寺宝篋印塔と比較した。英彦山のものには花卉に亀甲紋が彫り込まれている。二重の亀甲の稜線は、僅かに浮彫りとなっている。繊細な線で曲面上に美しく彫られており、高い技術がうかがえる。亀甲は万歳の寿齢を祝う吉祥文様であり、仏教思想との関連は薄い。ここでも否定されているのは蓮華の表象である。英彦山の反花は量感に優れ、造形的に亀を連想できるとはいえ、蓮華を亀に置

き換えるという発想力には驚かされる。

以上をまとめると、英彦山の宝篋印塔の改刻では、「種子」(宝篋印陀羅尼種子や金剛界五仏)と「蓮華」の表象が積極的に否定されていることが明らかになった。代わりに「献燈」の文字や「火袋」、「如意宝珠」、「亀甲紋」を彫り付けている。請花の如意宝珠に関しては、新しい発見であった。英彦山山伏の特別な意図が反映されている点は、火袋でありながら「仏教の五大思想を暗示させる意匠」を用いたこと、「仏教経文要約を彫り付けた部分」を残したことである。これらを分析すると、明治期の英彦山山伏は、「仏教の教義そのもの」ではなく、「仏教の権威や価値を荘厳する表象」を中心に改刻したと推測される。さらに、この塔が仏教に帰依するものであること暗示を示す暗示を、造形の中に巧みに取り入れている。視認性の高い部分のみを改変していることは、神兵(改革主義の青壮年)の暴挙への対抗策とみることもできる。修験道や仏教的教義を深く理解する修験者には、「猶是塔堅固不滅、一切如来神力」の文字や、「五大思想」を読み解くことができ、この塔が仏教遺物であることが理解されたことであろう。当時の山伏達は仏教・修験道不滅を祈り、後世の衆徒が読み解くためヒントを宝篋印塔の造形に託したのである。

### 三 宝篋印塔の月輪梵字に関する考察と復原

英彦山宝篋印塔の塔身から消失した種子を特定するために、他地域の宝篋印塔との比較考察を行う。豪潮は天台密教の宿曜に明かったことから、方位に対する意識は高かったと考えられる。<sup>(24)</sup> 豪潮作の宝篋

印塔の中で、廃仏毀釈や区画整理で移築されずに建立時のまま維持されているもののひとつに、大興善寺宝篋印塔がある。この塔は宝篋印陀羅尼種子が刻まれている部分が巨岩であり、破壊や移築をされていない。正面には南方を表す「宝生如来種子」が蓮華座の上に刻まれており、実際の方位も正確に南を向いている(図10)。この事実から、豪潮は「南面北座説」<sup>(25)</sup>を根拠として立塔していたと筆者は推定する。宝篋印塔は正面より、背面の種子が最も重要なのである。

英彦山宝篋印塔も建立から移築をしていないため、塔身の金剛界五仏の種子の配置は、実際の方位を重んじていると考えられる。現状の英彦山の塔の正面は、大興善寺と同じく南を向いている。大興善寺に倣い、英彦山宝篋印塔の種子想定として正面に南方の宝生如来(タラーク)、向かって右に東方の不空成就如来(ウン)、背面に北方の阿闍如来(アク)、向かって左に西方の阿弥陀如来(キリーク)を配置した。<sup>(26)</sup>

英彦山の北岳、中岳、南岳の三岳うち、最も尊格が高いのは北岳とされている。この復原の配置だと、尊格の高い北を南から遙拝する形となる。また廃仏毀釈後、

向かって右の東の阿闍如来を円(日光)に、向かって左の西の阿弥陀如来を半月(月光)に改刻したことに對しても整合性がある(図11、12)。



図10 大興善寺宝篋印塔塔身  
1802年

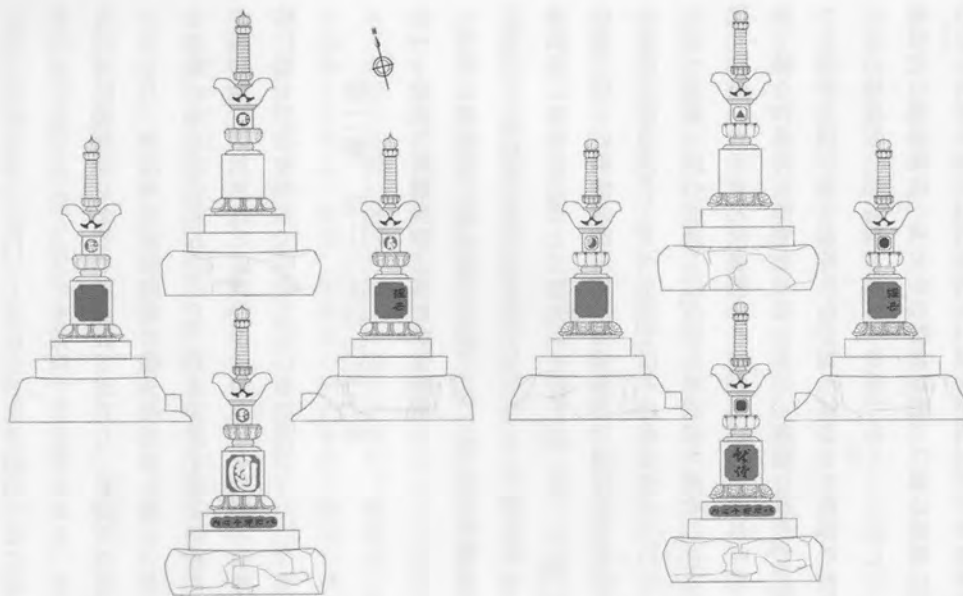


図11 英彦山宝篋印塔現状

図12 英彦山宝篋印塔復原想定図

実際の英彦山宝篋印塔を縮小して改刻前の姿を再現する。計測は、対象が野外にあり大型なため、長距離用三次元測定器<sup>27)</sup>を使用した。3Dデータ化によって、各スケールの計測、上部や直下からの形体を把握



図14 英彦山宝篋印塔復原模型



図13 英彦山宝篋印塔3Dデータ

することができた(図13)。これを三次元出力するには、データ上の大量の穴計測不可能な部分を補修する必要がある。そこで塔身や基壇等の意匠部分はレーザー加工機で出力し、基礎等は塑像で制作することとした。本河内の宝篋印塔の種子の拓本を取り、それをデータ化して英彦山のものに組み込んだ。如意宝珠がある請花については、宝珠が当初から彫刻されていたか否かが不明なため、豪潮作の他の宝篋印塔に倣って花卉のみで構成している(図14)。

## 第二章 彦山三所権現御正体

### 一 彦山三所権現御正体と廃仏毀釈

宝篋印塔の他に明治期に改変された英彦山修験道美術のひとつに《彦山三所権現御正体》<sup>(28)</sup>があげられる。この御正体は、三面の円形の銅銅板に神像(坐像)と二重火炎光背を鋳止めした懸仏形式<sup>(29)</sup>である。仏像ではない神像の御正体は稀である。国指定文化財となっており、文化庁文化遺産データベースではその希少性について「<sup>(30)</sup>牝のやや吊り上がった細い眼の面差しは古様な神像に共通するところであり、かつ彫りの深い衣えもん紋表現などにも同様のことがいえる。大形できわめて稀な神像御正体であるとともに、肉取り豊かで、神像特有の森嚴なる像容表現を見せる特色ある御正体として重要であり、かつ数少ない彦山権現の信仰資料としても貴重である」と記している。なお、懸仏形式の御正体は、平安から鎌倉初期では像は鏡板に鋳止めし、背面に鈕を鑄出すのが通例であり、鎌倉中期以降では像は鏡板にホゾ止め

される形式へと変化しているため、本御正体は鎌倉前期のものと考えられている。(図15上段)

英彦山の三岳には、神仏習合の考え方<sup>(31)</sup>本地垂迹<sup>(32)</sup>からそれぞれ三つの尊格が重なっている。修験者にとつて、北岳の尊格は天忍穗耳尊(法体権現)阿弥陀如来、中岳は伊邪那美尊(女体権現)千手観音、南岳は伊邪那岐尊(俗体権現)釈迦如来で



図15 彦山三所権現御正体 鎌倉時代・英彦山三所権現座像(部分) 江戸時代・土佐光淳彦山垂迹曼荼羅(部分) 1759年・知足美加子 英彦山三所権現御正体復原 2016年

あつた。この中で最も尊重されたのは天照大神の子である天忍穗耳尊を祀る北岳であつた。この御正体は、これらの神仏習合の概念を造形として表現したものである。

これら三面の御正体は、近代になり英彦山山内の別々の場所から発見されている。天忍穗耳尊像は英彦山神宮(奉幣殿保管)、伊邪那岐尊像は標高一一九九mの英彦山山頂にある上宮から平成三年の台風被害の際に見出された(光背は紛失)。その後、中腹にある下宮から伊邪那美尊像(像と光背は紛失し鏡面のみ)が発見された。これには「彦山下宮御正体 勧進大千房」という陰刻銘があり、英彦山下宮の御正体であつたことが明らかになつた。<sup>(32)</sup>

僧形の天忍穗耳尊は最も保存状態がよく、二重の頭光と身光が打ち出された銅板製の火炎光背も残っている。表情は威厳とともに一種の憂いを表現し、身体のスリムで明解なレリーフが存在感を高めている。丸彫りに近い頭部の頬には張りがあり、英彦山に根付く童子信仰<sup>(33)</sup>を彷彿とさせる。剃髪し報謝用の柄杓<sup>(34)</sup>を持つ姿は、神像としては珍しい。鎌倉期には快慶(生没年不明)が錫杖<sup>(35)</sup>を手にして蓮華座に座る僧形八幡神像(一二〇一年)を制作しており、本御正体も神が僧形として顕れる本地垂迹思想の反映と推測される。他にも神道と仏教が組み合わされた「神仏習合」の独特な意匠がある。銀色の錫<sup>(36)</sup>がかけられている円形の鍔物は、神道の「鏡」と仏教の「月輪」<sup>(37)</sup>のイメージが重なっている。

伊邪那美尊像については現在紛失しているため、御正体の神像表現

を参考にして作られたとされている《彦山垂迹曼荼羅》(一七五九年)と《彦山三所権現座像》(江戸時代)から考察したい(図15中段)。このふたつの作品の伊邪那美尊像は仏教の蓮華と宝珠をもっており、頭部の宝冠の造形は千手観音の輪郭に近いものがある。偶像表現が少ない神道の女神像には殆ど装飾を施さないのが通例で、これらの伊邪那美尊像のような華やかな造形は稀である。これは英彦山女体権現を表していると考えられる平安時代の《線刻千手観音鏡像》<sup>(38)</sup>(図16)の影響を受けたものと筆者は考えている。

伊邪那岐尊像は冠をかぶつた衣冠装束であり、通例の神像の意匠に準じている。これらの造形表現の中にみられる神仏習合思想の割合が、三つの像の保存状態と発見場所に関係していると筆者は考える。前述の通り、明治元年の布告は神仏習合を禁じるものであつた。廃仏毀釈においては、対象の全てではなく、その中心となるものや頭部を壊す



図16 線刻千手観音鏡像 平安時代

ことで全体を破壊したと「みなす」ことがある。三尊のものであれば、中心の本尊を積極的に破壊する場合がある。<sup>(37)</sup> 廃仏毀釈において、当初下宮の御神体であつた御正体について、中心にある伊邪那美尊像を外し、全体を破壊したとみなしたのであろう。また、

伊邪那美尊像の手に蓮華が配されていたことも、神仏混淆の表象として忌避された原因と見受けられる。鏡面部分のみを神道の意匠として、もともとの安置場所である下宮に置き、神仏習合的な意匠が複数見受けられた神像と火炎光背は遺棄されたと考えられる。

三面のうち上宮内で守られていた伊邪那岐尊像は火炎光背のみが紛失し、像自体は鏡面に再度鋳止めされている。このことから、仏教的な光背のみが意匠的に取り外されたと推測される。伊邪那岐尊像自体は神像の意匠に準じているため遺棄せず、上宮に安置したのでろう。

狭川真一は、廃仏毀釈によって本地仏が破壊された宝満山磨崖仏の中で、大日如来種子が現存することに注目し、神仏混淆の有無が破壊の線引きだったと推測しており興味深い<sup>38)</sup>。天忍穗耳尊像の場合、神仏習合を想起させる意匠はないが、仏像として破壊の対象となつたはずである<sup>39)</sup>。しかし天忍穗耳尊の面は改変されず、かつ最も保存状態がよいことから「廃仏毀釈を避けるために隠されていた」と推測される。古来より最も尊格が高い北岳の天忍穗耳尊像を守ろうとする神宮の意図があつたのかもしれない。

## 二 復原プロセスと考察

彦山三所権現御正体と後述する不動明王立像は、研究のみではなく失われた信仰対象の再現を目的として制作を行った。御正体の火炎光背は銅板を切り出されており、火炎部分の多くが破損している。そこで、筆者の方で残された火炎の形状から破損部分を推測し、原型を作成した。御正体は接触調査が難しい国指定文化財であり、かつ鍍金が

残っているため直接型を取ることができない。今回は英彦山神宮の許可のもと、非接触型の3Dスキャナで計測し、三次元出力後、蠟型鑄造を行った<sup>40)</sup>。《天忍穗耳尊像》の蠟型のレタッチを通じて、眉頭の彫りが非対称性であり、これが表情に複雑な深みを与えていることがわかった。

《伊邪那美尊像》の神像部分は残存しないので、伊邪那岐尊の頭部と、天忍穗耳尊の身体部分、さらに《彦山垂迹曼荼羅》《彦山三所現座像》《線刻千手観音鏡像》を参考にして成形を行った。向かって左手に蓮華を、右手には火炎宝珠を持たせ、伊邪那岐尊像の簡素な表現に倣い装飾は最小限に抑えることとした。

《伊邪那岐尊像》は、厳しい気象下にある上宮に安置されていたことから、天忍穗耳尊像よりも表面の凹凸が鈍っている。そこで、顔の表情の彫りを若干深くし、天忍穗耳尊に近づけた。伊邪那岐尊像の手元には金箔が残っており、この像が鍍金されていたことがわかつてい。また九州国立博物館の光学的調査によって、鏡面に残った銀色の箇所は錫(すず)であることが明らかになっている。復原においても鑄物の鏡面と光背に錫を引き、神像に金箔をはったところ、銀色の月輪の中に金色の神像が浮かび上がるような効果が得られた(図15下段)。

## 第三章 不動明王立像

### 一 不動明王立像と廃仏毀釈

不動明王は行者を守り導くものとして、修験道において重要視され

てきた。英彦山に残された数少ない不動明王像の中で、破損した光背を直接仏像に縛り付けているものがあつた。<sup>(41)</sup> (図17上段右)

この不動明王立像(鎌倉時代)は、衆生救済の象徴である羅索を持つ左手を伸ばし、体の正中線近くまで下方に突き出してゐる姿態が特徴的である。通常不動明王立像の左手は、体軀の横に置かれてゐる。左手を前方に置く姿勢は独特であり、このような造形の特徴をもつ不動明王を他に探したところ、滋賀県の苗村神社と熊本県の長寿寺(木原不動尊、図17下段右)に存在することがわかつた。これらの不動明王像の光背の火炎の形状、不動明王の表情と姿勢・環珞は、英彦山のものとは共通するものが多い。長寿寺は比叡山延暦寺の末寺で天台宗である。(天台密教の修行を行つた豪潮の宝篋印塔が建立されている)。また、苗村神社がある滋賀県には、天台宗の本山である比叡山があり、神社境内には日吉山王の十禪師社が勧請されていることを考慮すると天台系の可能性が高い。<sup>(42)</sup> これらの不動明王と英彦山は天台密教でつながつてゐると考えられる。彫刻的には苗村神社の不動明王立像の完成度が高く力強い。この彫刻が何らかの形で、英彦山や長寿寺の不動明王の作り手に影響を与えたのではないだろうか。

この不動明王立像は、発見時、両足がひざ下で折れてゐた。左腕は手首から前が欠損し、右腕は肘関節部分で分離してゐる。光背は上部が欠損し、不動明王の腰に紐で括り付けられてゐた。光背を仏像に直接結びつけてゐる造形は稀である。光背の高い位置に持ち上げて不動明王の胴体に固定してゐるため光背下部のホゾが剥き出しになつてゐる。

この不動明王の両足の破損の原因は、重い光背を直接仏像に背負わせた帰結であると筆者は考へてゐる。廃仏毀釈の際、破壊されたのは仏像部分ではなく光背だったのでないだろうか。不動明王の光背は迦楼羅焰<sup>かろうらえん</sup>という。迦楼羅は鳳凰のよう



図17 不動明王立像 鎌倉時代・苗村神社不動明王立像・長寿寺不動明王立像・知足美加子 不動明王立像復原 2016年

に美しく、翼を広げ火炎を吐き出している姿が光背を形づくっている。不動明王の光背の上部には迦楼羅の頭部が彫刻されていることが多い。迦楼羅の頭部部分を遺棄することで、像全体を破壊したとみなしたのであろう。もし最初に足が破壊されていたならば、倒れている仏像に對して、故意に光背を結びつける必要性があるだろうか。廃仏毀釈後に、迦楼羅頭部を排除して短くなった光背を持ち上げ仏像に紐で括つたため、脚部に負担がきて両足が折れたと考えると辻褄があう。

## 二 復原プロセスと考察

本不動明王の素材は針葉樹であり、おそらく杉だったと考えられる。古来より神聖な霊山である英彦山山内の木々は神仏のものであり、山外に持ち出してはいけないという掟があった。英彦山は「水分神」<sup>(45)</sup>として里のものたちに水を与え、里の人々の信仰と寄進を集めてきた。この信仰を支えたのは、水を生み出す山内の樹木、特に杉である。英彦山修験者は修行および山内環境整備の一環として、樹木を植えていた。英彦山八合目付近には「千本杉」といって、山伏たちが四五〇年前に植林しゾーニングした地域がある(平成三年の台風により壊滅的被害を受けた)<sup>(46)</sup>。今回の復原にあたって、英彦山神宮の協力により、倒木した千本杉を提供してもらっている。

不動明王立像の立脚は、彫刻的な観点からはほぼ体躯重心に近い位置にあると考え、向かって左に衣文を膨らませて配置を決定した。<sup>(46)</sup>現存の不動明王の眉間には三つの丸い突起があり、復原の過程で、かなり意識しないとこの形は彫り出せないことがわかった。三所権現を想定

したものではないだろうか。光背の欠損部分は、炎の動勢を延長して構想し、迦楼羅を炎の造形に馴染ませるように彫刻した。塗装は現存する光背の色合いから、弁柄<sup>(47)</sup>の柿渋<sup>(48)</sup>溶きで行った。英彦山修験者は十界修行の儀式の際、柿渋で染めた衣を身に着けており、柿渋

は英彦山に縁の深いものである。古式の方法に倣い、接着は膠<sup>(49)</sup>を使用している。

廃仏毀釈時、神兵数十名によって、木製仏像仏具の焼却が大規模に行われた。<sup>(48)</sup>英彦山には相当数の木彫仏像が存在していたと考えられる。英彦山杉による建築「板倉(安土桃山)」<sup>(49)</sup>は傾斜のある複雑な仕口で組まれており、山内に木に関する高い技術が存在したことを示している。田邊三郎助は、「靈木化現説」と神仏習合思想の関係を次のように説明している。自然崇拜は神の依り代として巨岩、巨木、水(滝)などを対象としてきた。靈木によって仏像を彫るということは、仏が神(木)を通じて顕現するという思考を生み出し、神仏習合思想へと繋がっていったという。靈木性の強調として、立木仏や鉈彫りの仏像、背面を荒彫りした仏像等が出現したと、田邊は述べている。<sup>(50)</sup>英彦山には草木を重んじる考え方があり、木を山外に持ち出すことへの忌避があった。鬼が手植えたという伝説が残る「鬼杉(樹齢約一二〇〇年)」、修行



図18 不動明王立像(部分) 2016年

の一環として植林した「千本杉」「行者杉」の存在は、英彦山修験道における木への崇敬と植林(木材活用)文化を伝えている。千本杉は風雪厳しい環境において少しずつ成長するため、固い木目が細かく連続している。堅牢な英彦山杉は磨くと自然な光沢をもち、復原においては素材を活かし塗装を施さなかった(図17左)。

### おわりに

本研究は、英彦山修験道美術の復原を通して、廃仏毀釈および修験道禁止令によって改変された意匠と、その表象の分析を行った。容認と否定の境界を精査することで、修験道文化の輪郭を明らかにした。

第一章では、明治期に燈籠として塔身、基壇、反花を改刻された豪潮作の宝篋印塔を取り上げた。この改刻では、「種子」と「蓮華」の表象が積極的に否定されていることがわかった。豪潮が制作した他の宝篋印塔と比較し、請花に八つの如意宝珠があることを新たに見出した。次に火袋改変の宗教的根拠を明らかにした。英彦山の塔身は、金剛界五仏種子を削り、火袋として「四角、円、三角、半月」を造形している。実際の方位として、円形(日光)は東方、半月形(月光)は西方に位置しており、燈籠の体を成している。しかし背面に三角形を配している燈籠は稀である。英彦山修験者は、この塔を単なる燈籠ではなく「五大思想を暗示させる仏教遺物」とするための造形的工夫を施したと推測した。五大として、正面から左回りに地(四角)、水(円)、火(三角)、風(半月)、空(団)中心の宝珠」と配置し、この塔が仏教に帰

依すること示す表現を、造形の中に巧みに取り入れていた。さらに英彦山山伏の特別な意図が反映されている点は、「猶是塔堅固不滅、一切如来神力」等の経文要約部分を残したことである。つまり英彦山山伏は、「仏教の教義そのもの」ではなく、「仏教の権威や価値を莊嚴する表象」を中心に改刻したと結論づけた。視認性の高い部分のみを改変していることは、急進派の神兵の暴挙への対抗策とみることもできる。当時の山伏たちが仏教・修験道不滅の祈りを宝篋印塔の造形に託していたことが明らかになった。さらに、英彦山宝篋印塔塔身の種子の配置について、英彦山における北岳への信仰と、南面北座説、移築をしていない大興善寺宝篋印塔の配置を根拠として推測した。実際の方位と北方遥拝を重視し、塔身正面に南方の宝生如来(タラク)、向かって右に東方の不空成就如来(ウシ)、背面に北方の阿閼如来(アク)、向かって左に西方の阿弥陀如来(キリク)が刻まれていたと想定した。

第二章では、彦山三所権現御正体について、意匠の分析から廃仏毀釈の影響と各面の発見場所の違いについて考察を行った。その中で、光背や蓮華、神像が同面に造形された神仏混淆の表象が意図的に省かれたことを明らかにした。明治期に、伊弉諾尊像は光背を排除され、純粹な神像として英彦山上宮に置かれた。伊弉那美尊像は、蓮華をもった神像と光背が排除され、神鏡として元の英彦山下宮に置かれた。天忍穗耳尊像は保存状態がよいことから、僧形仏像としての破壊を免れるため、深く隠されていたと推測した。

第三章では、不動明王立像について、縄索を持つ手を前に突き出す

造様から、滋賀県苗村神社との関連の可能性を示した。この像の光背と脚部の破損個所の分析から、廃仏毀釈時に光背(迦楼羅)の破壊が、その後の両足の損傷をまねいたと推測した。また英彦山修験道における、木への崇敬と植林文化について述べた。

以上の修験道美術の改変の分析および復原を通して、修験者達の「信仰対象を破壊しなければならないという矛盾と葛藤」を読み取ることができた。国家神道に歩み寄るための改変の中に、仏教・修験道不滅への願いが込められていた。観て分析すること以上に、作ること理解できた英彦山修験者たちの智慧と技術がある。今回の復原のうち、彦山三所権現御正体と不動明王立像は新たな信仰対象として、奉幣殿再建四〇〇年護摩焚きの際公開された。現在は奉幣殿に祀られている(図21)。二〇一七年二月「わが国を代表する山岳信仰の遺跡で、修験・仏教・神道の在り方を考える上で重要」として国指定史跡に登録されている。一度失われた文化を再興することは困難だが、今後修験道美術に残された先人の偉業を観察・熟考し、文化継承のひとつの手掛かりとしていきたい。

#### 註

(1) 慶応四年(一八六八)三月十七日、神祇事務局は諸国神社に仕える僧形の別当・社僧に還俗を命じ、二十八日に太政官は神仏分離令(神仏判然令)を発した。太政官は同年四月十日には、神仏分離の実施には慎重を期すよう命じたが、各地域で神仏分離を超えた廃仏棄釈とよ

ばれる事態が明治七年(一八七四)ころまで続いた。

(2) 太政官布告第二七三号、明治五年(一八七二)九月十五日「修験宗ノ儀自今被廢止本山当山羽黒派共從來ノ本寺所轄ノ儘天台真言ノ兩本宗へ歸入被 仰付候条各地方官ニ於テ批旨相心得管内寺院へ可相達候事。但、将来當生ノ目的等無之ヲ以、帰俗出願ノ向ハ始末具狀ノ上、教部省ニ可申出候事」

(3) 主に建築分野において「復元(失われたもののかつての姿どおりに新たに作る)」と「復原(改造され、変化してしまった現状を元の姿に戻す)」を区別している。

(4) 高千穂有英「幕末秘史英彦山殉難録」英彦山殉難大祭委員会一九六五年一一一―一二五頁、広渡正利「英彦山信仰史の研究」文研出版一九九四年二四五―二四九頁

(5) 「由緒ならびに、鰐口、梵鐘、仏具等の類、委細書付け、来る二〇日までに差し出されし」「神仏混淆を廃止されたので、別当・社僧の輩は、還俗の上、神主・社人等の称号に改め、神道を以て勤仕すべきこと。還俗の者は、僧位、僧を官返上すべきこと。勤仕の場合の服装は、当分、風折烏帽子、浄衣じやうえ白差さし貫ぬきを着用すること」と

(6) 英彦山の表記について、古代は太陽信仰に基づく「日子山」であったものが、弘仁十年(八一九)法蓮によって「彦山」に改められ、享保十四年(一七二九)靈元法皇より天下に拔き出た靈山であるとして「英」の字が授けられ「英彦山」と称するようになった。

(7) 中国五代末期の顕徳二年(九五五)、呉越王錢弘俶は八万四千基の金塗小塔を造立し諸国に分けた。「宝篋印陀羅尼」とは一切如来の全身舍利の功德を集めた四十句からなる(国史大辞典)。

(8) 寛政十二年(一八〇〇)、国主(細川侯)は豪潮が諸国の大名に請迎されないよう、彼に九州の外に出ることを禁じた。石田豪澄『豪潮律師遺墨集』日貿出版一九八二年一七五頁

(9) 熊本県、大分県、佐賀県、福岡県、長崎県、愛知県、京都府、神奈川県(愛知県長栄寺のものを移築)等に現存している。宇野廉太郎『豪潮律師の研究』日本講義社一九五三年六一―七六、一九二―一九九頁

(10) 北島雪山(一六三六―一六九七年)、秋山玉山(一七〇二―一七六四年)と共に「肥後の三筆」と称えられる。

(11) 永松謙二『豪潮』城野印刷一九七二年一八三頁

(12) 熊本県の西蔵殿寺、長寿寺は、二〇一六年四月の熊本震災により部分的に損壊している。

(13) 長崎ではキリスト教の禁教令により元和・寛永年間(一六一五―一六四四)の間に多くの仏教寺院が建立された。春徳寺は教会の跡地に建立されている。明治維新では仏教排斥以上に苛烈なキリスト教弾圧(一八六七年「浦上四番崩れ」等)が行われた。

(14) (7)前掲書一八三頁

(15) 養和元年(一一八二)に後白河法皇は今熊野神社に対して全国の荘園二八箇所を寄進した。その一つに「豊前国彦山」がある。国役免

除の特権は守護不入(守護による干渉を受けない特例地域)へと発展した。長野覺「山岳宗教(修験道)集落・英彦山の構造と経済的基盤」駒澤地理一五、一九七九年二〇頁

(16) 宝永七年(一七一〇)の総人口は三〇一五人であった。長野覺『英彦山修験道の歴史地理学的研究』四九〇頁

(17) 宝篋印塔各部名称に関しては、「日本大百科全書(小学館)」を参考にしている。

(18) 灯籠の火をともし所

(19) 関忠夫「宝珠の造形意匠」東京都国立博物館紀要一〇、一九七五年二二―二三頁

(20) 宇野廉太郎『豪潮律師の研究』日本講義社、一九五三年七一―七二頁

(21) 長野覺「修験道の歴史と現状」『神仏習合と修験』新潮社、一九八九年三一―四頁

(22) (19)前掲書二三五頁

(23) (20)前掲書三一四頁

(24) 「日田市・月出山岳の仏塔、天台密教の占星術刻む。高僧・豪潮の影響か」毎日新聞、二〇一六年一月十九日地方版

(25) 天子南面説ともいい、北極星のように天の中心にいる天子が、北を背にして南方の臣下に向かうという古代中国の考え方。天子の左が日の昇る東にあたるため、向かって右が優位となる。西方浄土説を重視すると東面西座となる。

- (26) 英彦山は中岳山頂の上宮神殿に三峰の神が合祀されており、その中央には「北岳」の祭神である天忍穗耳命が配されている。
- (27) Faro Focus3D X 130を使用。
- (28) 天忍穗耳尊像 鏡面径四四・九cm、伊邪那美尊像 鏡面径四三・四cm、伊邪那岐尊像 鏡面径四四・八cm 井形進「美術工芸資料」『英彦山総合調査報告書(本文編)』添田町教育委員会 二二〇六年二一九一二二〇頁
- (29) 御正体は懸仏ともいい、円形板に仏像等のレリーフを取付けたものである。上方ニカ所に鈎手環をつけ、堂内に懸け礼拝する。
- (30) 文化遺産データベース <http://bunka.nii.ac.jp/db/heritages/detail/166195>(二〇一七年十二月十二日確認)
- (31) 平安時代より始まった仏・菩薩を本地とし、神を衆生救済のための垂迹とする考え方。神と仏を共に祀るあり方。
- (32) 伊邪那美尊像鏡面には「大檀那」「左衛門尉藤原能直 三国守護」と龍字状銘文があるが、井形進は能直(大友氏の祖)の三国守護について史実との違いを指摘している。(28)前掲書二二〇頁
- (33) 彦山流記(鎌倉期)によると、英彦山の垂迹の初めは三尺六寸の八角の水晶石で、般若窟に天下った後、四十九窟に御正体を分かち、権現と守護天童を安置したという。添田町役場『彦山流記』葦書房一九九三年九頁
- (34) 快慶作『富楼那立像』(二二二〇年)における釈迦十大弟子の富楼那が柄杓を持っている。
- (35) 仏教における月輪とは満月であり、完全無欠であることの象徴、および仏や仏の知恵を表すものである。
- (36) 東京国立博物館 [http://www.tnm.jp/modules/r\\_free\\_page/index.php?id=1591](http://www.tnm.jp/modules/r_free_page/index.php?id=1591)(二〇一七年十二月十二日確認)
- (37) 拙著「3Dデータ化による修験道美術の再現」英彦山今熊野窟を中心に「山岳修験」二〇一四年八四頁
- (38) 狭川真一「宝満山磨崖仏と廃仏毀釈」『都府楼四八』古都大宰府保存協会二〇一六年六九頁
- (39) 英彦山今熊野窟の月輪大梵字(一二三七年)や、玉屋窟磨崖仏(一四三三年)はいずれも険しい環境内にあり、廃仏毀釈の対象にならなかったと考えられる。
- (40) 鑄造は鑄造家の石上洋明、3D計測・出力は九州大学学生(河田尚子)に依頼した。
- (41) 針葉樹材 寄木造 彫眼 彩色 鎌倉時代 英彦山神宮所蔵 英彦山修験道館保管 像高四四・六cm(28)前掲書二二五頁
- (42) 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課(美術工芸・民俗係)古川史隆からの書簡(二〇一六年八月二三日付)
- (43) 木材などを接合する際、一方の端部に作る突起。
- (44) 慶長五年(一六〇〇)、徳川家康面前で裁決された英彦山の独立を保障する条文には「当山のこと、先規の旨に任せられ、守護不入、十方檀那とすべきこと」の他「山中の竹木、他方より伐採すべきこと」と記されている。高千穂有英(4)前掲書一一四頁

(45) 英彦山には標高で区切られた四土結界しどけつかいじようじやつこうど（常寂光土、実報社じつぽうしやうこんど、方便浄土、凡聖同居土ぼんしやうどうど）があり、千本杉は実報社じつぽうしやうこんどの結界内に存在した。

(46) 3D計測・切削加工機出力(MDX-540Roland)は九州大学学生(宮田庸佑)に依頼した。

(47) 十界修行のうち胎藏界の「四聖（聲聞界、縁覚界、菩薩界、仏界）」の儀式。村上龍生『英彦山修験道考』海鳥社一九九九年八八～一四九頁

(48) 広渡正利(4)前掲書二四八頁

(49) 和田一雄「英彦山の建築」『増補英彦山』葦書房一九七八年九七八～一〇〇四頁

(50) 田邊三郎助編集『神仏習合と修験』新潮社一九八九年七〇～八二頁

(51) 山川草木国土悉皆成仏さんぜんそうこくどしつかいじやうぶつ『中陰経』にいうといわれてきた偈げの一部。草木土石のように非情のものでも、ことごとく成仏できるという意。平安末、院政期ごろ、口伝法門系で偽作された偈と見られる(仏教語大辞典)。

\* 本研究はJSPS科研費16K02314の助成を受けている。鋳造関連経費は英彦山神宮から助成を受けている。

(ともたり・みかこ) 九州大学芸術工学研究員准教授